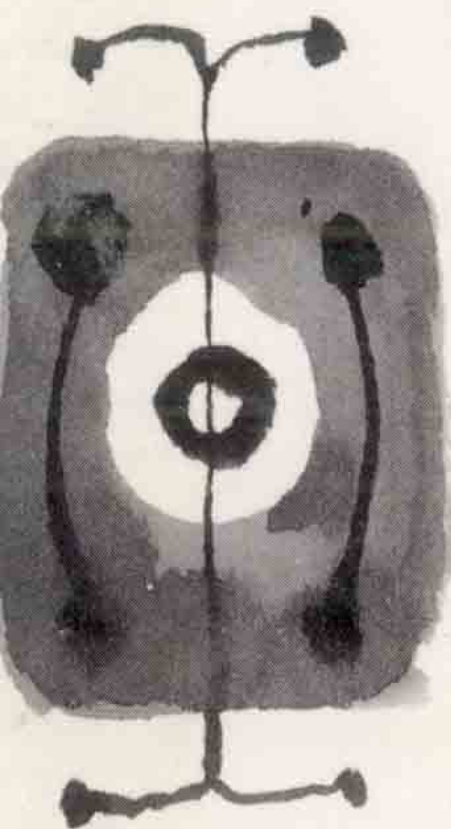


或日の大石内蔵之助

枯野抄

他十二篇

芥川竜之介作



志をとげた後の大石の微妙な心の動きを分析し、忠義とか仇討ちへの賛美を静かに批判した表題作。芭蕉の死の床での弟子たちの感慨に托して、芥川に深い人格的影響を与えた漱石の、臨終をめぐる門弟たちの心理的反応を描く「枯野抄」。本書には、主として題材を江戸から幕末・明治初期にもとめた14篇を選び収めた。(解説＝中村真一郎)



あるひ おおいしくらのすけ かれのしょう
或日の大石内蔵之助・枯野抄 他十二篇

1991年2月18日 第1刷発行 ©

作 者 あくた がわ りゅう の すけ
芥 川 竜 之 介

発 行 者 安 江 良 介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-3265-4111(案内)

定価はカバーに表示してあります

印刷・三 陽 社
製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-310709-8

文 庫

0-9

或日の大石内蔵之助・枯野抄

他十二篇

芥川竜之介作



岩波書店

目 次

世之助の話	五
或日の大石内蔵之助	一七
戯作三昧	三三
開化の殺人	七一
枯野抄	八五
開化の良人	九七
鼠小僧次郎吉	一二三
舞踏会	一四五

世之助の話

上

友だち ところでね、一つ承^{うけたま}わりたい事があるんだが。

世之助 何だい。莫^ば迦^かに改^かまつて。

友だち それがさ。今日はふだんとちがつて、君が近々に伊豆^{いず}の何とかいう港から船を出して、女護^{にょご}ヶ島へ渡ろうという、その名残りの酒宴だろう。

世之助 そうさ。

友だち だから、こんな事をいい出すのは、何だか一座の興を殺^そぐような気がして、太夫^{たゆう}の手前^{まへ}も、聊^{いささ}恐縮^{おそそく}なんだがね。

世之助 そんなら、よせばいいじゃないか。

友だち ところが、よせないね。よせる位なら、始^{はじめ}からいい出しはしない。

世之助 じゃ話^わすさ。

友だち それがさ、そうなかなか簡単には行かない訳がある。

世之助 何故？

友だち 尋く方も、尋かれる方も、あんまりありがたい事じゃないからね。尤も君がいよいよいいといえ、私も度胸を据えて、承る事にするが。

世之助 何だい、一体。

友だち まあさ、君は何だと思う。

世之助 じれったい男だな。何だっていえば。

友だち いやそう開き直られると、かえっていい出しにくいがね。つまり何さ。——この頃西鶴が書いた本で見ると、君は七つの時から女を知って……、

世之助 おい、おい、まさか意見をする気じゃあるまいね。

友だち 大丈夫、叔父さんがまだ若すぎる。——そこで、六十歳の今日まで、三千七百四十二人の女に戯れ……

世之助 こいつはちと手きびしいな。

友だち まあさ、三千七百四十二人の女に戯れ、七百二十五人の少人を弄んだという事だが、あれは君、ほんとうかい。

世之助 ほんとうだよ。ほんとうだが、精々お手柔かに願いたいな。

友だち それが、どうも私には少し真にうけられないんだね。いくら何だって君、三千七百四十二人は多すぎるよ。

世之助 なるほどね。

友だち いくら君を尊敬した上でもだよ。

世之助 じゃ勝手に割引して置くさ。——太夫が笑っているぜ。

友だち いくら太夫が笑っていても、このままにはすまされない。白状すればよし、さもなければ、——

世之助 盛りつぶすか。そいつは御免を蒙ろう。何もそんなにむずかしい事じゃない。唯、私の算盤が、君のと少しちがっているだけなんだ。

友だち ははあ、すると一桁狂ったという次第かい。

世之助 いいえ。

友だち じゃ——おい、どっちがじれったい男だっけ。

世之助 だが君もまた、つまらない事を気にしたもんだ。

友だち 気にするって訳じゃないが、私だって男だろうじゃないか。何割引くか判然しない中は首を切られても、引きさがらない。

世之助 困った男だな。それならお名残りに一つ、私の算盤のとり方を話そうか。——おい、「加賀節」はしばらく見合せだ。その祐善の絵のある扇をこっちへよこしてくれ。それから、誰か蠟燭の心を切ってもらいたいな。

友だち いやに大袈裟だぜ。——こう静になって見ると、何だか桜もさむいようだ。

世之助　じゃ、始めるがね。勿論唯一例を話すだけなんだから、どうかそのつもりに願いたい。

中

もうかれこれ三十年ばかり昔の事だ。私が始めて、江戸へ下った時に、たしか吉原のかえりだったと思うが、太鼓を二人ばかりつれて、角田川の渡しを渡った事がある。どこの渡しだったか、それも今では覚えていない。どこへ行くつもりだったか、それももう忘れてしまった。が、その時の容子だけは、こういう中にも、臃げながら眼の前へ浮んで来る。……

何でも花曇りの午すぎで、川すじ一帯、どこを見ても、煮え切らない、退屈な景色だった。水も生ぬるそうに光っていれば、向う河岸の家並も、うつらうつら夢を見ているように思われる。後をふり返ると、土手の松にまじって、半開の桜が、べったり泥絵具をなすっていた。そのまたやけに白いのが、何時になく重くるしい。その上少し時候はずれの暖さで、体さえ動かせば、すぐじっとりと汗がにじむ。勿論そういう陽気だから、水の上にも、吐息ほどの風さえない。

乗合は三人で、一人は『国姓爺』の人形芝居からぬけ出して来たような、耳の垢取り、一人は二十七、八の、眉をおとした町家の女房、もう一人はその伴らしい、漬をたらした丁稚だった。それが互に膝をつき合せて凡まん中どこに蹲ったが、何分舟が小さいので、窮屈な事夥しい。そこへまた人が多すぎたせい、ともすれば、舷が水にひたりそうになる。が、船

頭は一向平気なもので、無愛想な老爺の、竹の子笠をかぶったのが、器用に右左へ棹を使う。おまけにその棹の雫が、時々乗合いの袖にかかるが、船頭はこれにも頓着する容子がない。——いや、平気なのは、まだ外にもある。それは例の甘輝字は耳の垢とりで、怪しげな唐装束に鳥の羽毛のついた帽子をかぶりながら、言上げの幟を肩に、獅子ヶ城の櫓へ上ったという形で、舳の先へ陣どったのが、舟の出た時から、つけ髯をしごいては、しきりに鼻唄をうたっている。眉のうすい、うけ唇の、高慢な顔を、仔細らしくしゃくりながら、「さん谷土手下にぬしのない子がすててんある」と、そそのるのだから、これには私ばかりか、太鼓たちも聊かたじろいだらしい。

「唐人の『すててん節』は、はじめてでげす。」

一人が、扇をぱちつかせながら、情ない声を出して、こういった。すると、それが聞えたのだらう。私と向いあっていた女房が、ちよいと耳の垢とりの方を見ると、すぐにその眼を私にかえして、鉄漿をつけた歯を見せながら、愛想よく微笑した。黒い、つやつやした歯が、ちらりと唇を洩れたかと思うと、右の頬にあさく齧が出来る。唇には紅がぬってあるらしい。——それを見ると、私は妙にへどもどして、悪い事でも見つけられた時のような、一種の羞恥に襲われてしまった。

が、こういったばかりでは、唐突すぎる。曰くは、この舟へ乗ったそもそもからあったのだから。——というのは、最初、土手を下りて、あぶなっかしい杭を力に、やっと舟へ乗ったと

思うと、足のふみどころが悪かったので、ふなべり 舐が水をあおると同時に、大きく一つぐらりとゆれる。その拍子に、きやち 伽羅の油のおいが、ぷんと私の鼻を打った。舟の中に、女がいる——その位な事は、土手の上から川を見下した時に、知っていた。が、ただ 唯女がいるというだけで、くるわ (廓のかえりではあるし)それが格別痛切にそう思っていた訳でも何でもない。だから、伽羅の油のおいを嗅ぐと、私は、まず意外な感じがした。そうしてその意外の感じの後には、すぐに一種の刺戟を感じた。

唯においだからといっても、決して莫迦にしたものではない。少くとも私にとっては、大抵な事が妙に嗅覚と関係を持っている。早い話が子供の時の心もちだ。手習に行くと、よくいたずらっ子にいじめられる。それも、師匠にいつければ、後の祟が恐ろしい。そこで、涙をのみこんで、一生懸命にまた、草紙をよごして行く。そういう時のさびしい、たよりのない心もちは、成人になるにつれて、忘れてしまう。あるいは思い出そうとしても、容易に思い出し悪い。それが腐った灰墨のおいを嗅ぐと、何時でも私には、そんな心もちがかえって来る。そうして、子供の時の喜びと悲しみとが、もう一度私を甘やかしてくれる。——が、これは余事だ。私は唯、伽羅の油のおいが、急にこの女房の方へ、私の注意を持って行った事さえ話せばよい。

さて、気がついて、相手を見ると、くろはぶたえ 黒羽二重の小袖に裾取の紅うらをやさしく出した、小肥りな女だった、が、からありよせじま 唐織寄縞の帯を前でもすんだ所といい、なげしまた 投島田に平元結をかけて対のさし

櫛をした所といい、素人とは思われない位な、なまめかしさだ。顔はあの西鶴の、「当世の顔はすこしまろく、色はうすはな桜にて」というやつだが、「面道具の四つ不足なく揃ひて」はちと覚束ない。白粉にかくれてはいるが、雀斑も少々ある。口もとや鼻つきも、やや下品だった。が、幸生際がいいので、そういう難も、大して目に立たない。——私はまだ残っていた昨夜の酔が、急にさめたような心もちがして、その女の側へ腰を下した。その下した時にまた、曰くがある。

曰くというのは、私の膝が、先方の膝にさわったのだ。私は卵色縮緬の小袖を着ている。下は多分肌着に隠し緋無垢だったろう。それでも、私には、向うの膝がわかった。着物を着た膝ではない。体の膝がわかったのだ。柔な円みの上に、かすかなくぼみが、うすく膚臍をためている——その膝がわかったのだ。

私は、膝と膝とを合せたまま、太鼓を相手に気のない冗談をいいながら、何かを待設けるような心もちで、じつと身動きもしないでいた。勿論その間も、伽羅の油のにおいと、京おしろいのにおいとは、絶えず私の鼻を襲つて来る。そこへ、少したつ中には、今度は向うの体温が、こちらの膝へ伝わって来た。それを感じた時のむず痒いような一種の戦慄は、到底形容する語がない。私は唯、それを私自身の動作に翻譯する事が出来るだけだ。——私は、眼を軽くつぶりながら、鼻の穴を大きくして、深くゆるやかな呼吸をした。それで君に、すべてを察してもらうより外はない。

が、そういう感覚的な心もちは、すぐにもう少し知的な欲望をよび起した。先方も私と同じ心もちでいるだろうか。同じ感覚的な快さを感じているだろうか。——それはこういう疑問だった。そこで私は、顔をあげて、わざと、平気を装いながら、じつと向うの顔を見た。が、そのつけやきばの平気は、すぐに裏切られるような運命を持っていた。何故かという、相手の女房は、そのやや汗ばんだ、顔の筋肉のゆるみ方と、吸うものをさがしているような、かすかな唇のふるえ方とで、私の疑問を明かに肯定してくれたから、そうして、その上に、私自身の心もちを知っていて、その知っている事に、或満足を感じている事さえも、わからせてくれたから——私は聊か恐縮しながら、てれがくしに太鼓の方をふりむいた。

「唐人の『すててん節』は始てでげす。」

太鼓がこういったのは、丁度その時だった。耳の垢とりの鼻唄を笑った女房と、私が思わず眼を見合せて、一種の羞恥を感じたのは、偶然でない。が、その羞恥は、当時、女房に対して感じた羞恥のような気がしていたが、後になって考えて見ると、実は女房以外の人間に対して感じた羞恥だった。いや、そういつては、まだ語弊がある。人間がそういう場合、一切の他人（この場合なら、女房も入れて）に対して感じる羞恥だった。これは当時の私が、そういう羞恥を感じながら、女房に対しては、次第により大胆になれたのも、わかりはしないだろうか。

私は全身のあらゆる感覚を出来るだけ鋭くしながら、香を品する人のような態度で、相手の女房を「鑑賞した。」これは私が殆すべての女に対してする事だから、大方君にも以前に話し

た事があるだろう。——私はやや汗ばんだ女の顔の皮膚と、その皮膚の放散するにおいとを味^{あじ}った。それから、感覚と感情との微妙な交錯に反応する、みずみずしい眼の使いを味った。それから、血色のいい頬^{ほお}の上で、かすかに動いている睫毛^{まつげ}の影を味った。それから、膝へのせた手の、うるおいのある、しなやかな、指のくみ方を味った。それから、膝と腰とにわたる、むっちりした、弾力のある、ゆたかな肉づきを味った。それから——こう話して行けば、際限がないから、やめにするが、とにかく私はその女房の体を、あらゆる点から味った。敢^{あえ}て、あらゆる点といつても、差支えはない。私は感官の力の足りない所を、想像の働きで補^{おぎな}った。あるいは、その上にまた、推理の裏打^{うらうち}さえも施した。私の視覚、聴覚、嗅覚^{きゆうかく}、触覚、温覚、圧覚、——どれ一つとして、この女房が満足させてくれなかったものはない。いや実に、それ以上のものにさえ満足を与えてくれた。……………

「忘れものをおしでないよ。」

それから、こういう声を聞いた。そうしてそれと同時に、今まで見えなかった、女の細い喉^{のど}が見えた。その蓮葉^{はすは}な、鼻にかかった声と、白粉^{おしろい}の少しむらになった、肉のうすい喉とが、私に幾分の刺戟^{しげき}を与えるのはいうまでもない。が、それよりもむしろ、私を動かしたのは、丁稚^{てうぢ}の方へふりむいた時の動作が、私の膝へ伝えてくれる、相手の膝の動き方であった。私は前に、

向うの膝がわかったといった。が、今はそれだけではない。向うの膝のすべてが——それをつくっている筋肉と関節とが、九年母の実と核とを舌の先にさぐるように、一つ一つ私には感じられた。黒羽二重くろはふたえの小袖こそでは、私にとってないにひとしかったといつても、過言ではない。これは、すぐ次に起つた最後の曰いわくを知つたなら、君も認めない訳には行かないだろう。

やがて、舟は棧橋さんばしについた。舳へさきがとんと杭くいにあたると、耳みみの垢あかとりは、一番に向うへとび上る。その途端に私は、わざと舟のあおりを食つたように装つて、（乗る時にも、そうだったので、これは至極自然に見えるだろうと思つていた。）よろけながら、手を舳ふなべりの上にある女房の手にかけた。そうして、太鼓に腰を支えられながら「これは失礼」と声をかけた。君はその時、私がどんな心もちだったと思う？ 私は、この接触から来るかなり強い刺戟を予想していた。

恐らく私の今までの経験は、最後の仕上げを受ける事だろうとさえも思つていた。が、この予想は見事に、外れてしまったではないか。私は勿論もちろん、滑なめらかな、むしろつめたい皮膚の手ざわりと、柔かい、しかも力のある筋肉の抵抗とを感じた。しかし、それらは、結局今までの経験の反覆はんぷくにすぎない。同じ刺戟は、回数と共に力を減じて来る。ましてこの時は予想が大いおおき。私は索漠さくぼくとした心もちで、静しずかに私の手をはなさなければならなかった。もし私の今までの経験が、完全にこの女房の体を鑑賞したのでなかったなら、こういう失望はどうして、説明する事が出来るだろう。私はこの女を、感覚的に知りつくした。——どうしても、こう考えるより外はない。これは、またこういう事から考えて見ても、わかるだろう。それは私が昨日なじんだ吉原よしわらの

太夫と、今の女房とを、私の心もちの上でくらべて見るとする。なるほど一人は一夜中一しよに語りあかした。一人は僅わずかの時間だけ、一つ舟に乗っていたのに過ぎない。が、その差別は、膚下一寸でなくなってしまう。どちらが私に、より多く満足を与えたか、それは殆どわからぬ。従つて、私が持っている愛惜も（もしそういうものがあるとするれば）全く同じようなものである。私は右の耳に江戸清掻すがきの音を聞き、左の耳に角田川すみだがわの水の音を聞いているような心もちがした。そうしてそれが両方とも、同じ調子を出しているような心もちがした。

これは、私にはともかくも発見だった。が、総じて、発見位、人間をさみしくするものはない。私は花曇りの下を、丁稚を伴ともにつれて、その眉まゆのあとの青い女房が、「ぬきあし中ちゅうびねりのあるきかた」で、耳の垢とりの後から、棧橋を渡るのを見た時には、何ともいえずさびしかった。勿論惚ほれた訳でも何でもない。唯向うでも大体私と同じような心もちでいたという事は、私のさわった手を動かさずにいたのでも、わかるだろう。……

なに吉原の太夫？ 太夫はまるでそれと反対な、小さい、人形のような、女だった。

下

世之助 まずざつと、こんなものだった。そこで、それ以来、その女のようなものを関係した

中へ勘定したから、合せて男女四千四百六十七人に戯れた事になるという次第さ。

友だち なるほど、そう聞けば尤もつともらしい。だが……